

第60回クズ

カミウチン かほくがたチルドレン

ヒロ



葛根が丈夫で
増えすぎると
除去が大変



その根が葛モチや
おきりの原料
なんきだよ

でも!



葛根湯って
かぜの薬も
作れるし...



ちよ! それ
葛モチじゃ
ずるいよ!

クズはマメ科のつる性の多年草で、日本原産の植物といわれています。冬は地上部は枯れますが、根は何年も残り肥大して巨大な根茎を作ります。この根は、昔から食用や漢方薬として使われ、葛粉や葛根湯などの原料になります。芽生えの時のつるや葉は天ぷらにしてもおいしく、繊維を利用した織物は葛布と呼ばれ、利用価値の高い植物ですが、河北潟干拓地では、繁殖力の旺盛なやっかいな植物になっています。

クズのようなつる植物はマント群落と呼ばれ、林縁を覆い森を守る役割も果たしていますが、一方で樹木全体を覆ってしまい、場合によっては樹木を枯らしてしまう場合もあります。河北潟干拓地では、防風林帯の樹木を覆い尽くすほど繁茂するために、防風林帯の機能維持と景観形成の上では障害となっています。また除草管理されている区間では、刈り払い機に絡みついたりするので、除草の困難を増す要因になっています。また、刈り取っても地下の根茎は生きていますので駆除が難しい植物になっています。

こうしたクズの特性は、近年クズが導入されたアメリカ合衆国でも問題となっており、当初は園芸植物や飼料用植物として持ち込まれたものが、現在では300万haにも拡がり、在来の樹木との競合が起こっています。また、マメ科であるクズによる窒素の固定が、在来の森林の生物多様性、森林における窒素循環、流域での窒素飽和、淡水の富栄養化、および地域の大気質にも影響を与えている可能性があることが示唆されています (<https://www.tandfonline.com/doi/abs/10.1080/07352680490505150>)。そのため現在では、アメリカ合衆国ではクズは侵略的外来種として認識されています。日本でも駆除が難しく除草剤も効きにくい植物として知られていますが、日本より温暖な北ア

メリカ東南部ではたいへんな問題になっているようです。

こうした問題もあるクズですが、旺盛な繁殖力を活かし、有用植物として利用することも考えてみるのも良いかと思っています。石川県では宝達山がクズの産地として有名で、宝達葛として和菓子の原料にも使われています。一度、河北潟の葛で葛粉を作ってみようと考えたこともありましたが、葛の根を掘るところから始まってデンプンを取り出すまでにはたいへんな作業量が必要ということが分かり、早々に諦めてしまいました。河北潟干拓地に繁茂するクズ群落、軟弱な私たちにもできる利用法をなんとか考えていきたいと思っています。(文：高橋 久)